長野県（上伊那地域振興局）プレスリリース　令和８年（2026 年）10 月 21 日

上伊那地域の伝統的工芸品を伊那合同庁舎内に展示します

新たに長野県伝統的工芸品に指定された高遠焼（たかとおやき）をはじめとした上伊那地域の伝統的工芸品の魅力をお届けします。

１　上伊那地域の伝統的工芸品の概要

工芸品名	製造地域	指定年月日	展示する製品
伊那紬※1（信州紬）	駒ヶ根市	昭和50年２月17日（国指定）※2	マフラー、テーブルセンター、メガネケース
龍渓硯（りゅうけいすずり）	辰野町	昭和62年２月10日（県指定）※3	硯（筆置き付きを含む）、印鑑入れ、花入れ
高遠焼	伊那市	令和８年９月16日（県指定）※3	コーヒーカップ、湯呑、丸皿、花入れ、箸置き

※１　県内各地（長野市、松本市、上田市、岡谷市、飯田市ほか）の紬と共に、信州紬として指定
※２　伝統的な技術又は技法により、10者以上の事業者が100年以上継続して製造している工芸品
※３　伝統的な技術又は技法により、１者以上の事業者が50年以上継続して製造している工芸品

２　各伝統的工芸品の特徴

工芸品名	特徴
伊那紬	植物染料を用いた草木染により様々な色合いがある紬
龍渓硯	石質が緻密で適度な堅さである黒石を手彫りで加工した硯
高遠焼	二種類の釉薬（ゆうやく）を重ね合わせた温かみのある風合いの陶器

３　展示場所

伊那合同庁舎２階　県民ホール前

４　展示時期

令和８年10月22日（木）～　常設展示（展示品は定期的に入替えを行います。）


【伊那紬】


【龍渓硯】


【高遠焼】

長野県150th NAGANO　わたしの、私たちの長野県。
150th Anniversary 1876-2026

（問合せ先）
担　　当　上伊那地域振興局商工観光課
　　金井、田村
電　　話　0265-76-6832（直通）
ファクシミリ　0265-76-6890
電子メール　kamichi-shokan@pref.nagano.lg.jp

資料１

昭和 50 年２月 17 日指定

信州紬（伊那紬）





【製造地域】
上田市、松本市
飯田市、長野市
岡谷市、駒ヶ根市
ほか

概要

信州は、古来より養蚕が盛んであり、明治時代以降、基幹産業として製糸業が発展し、岡谷・諏訪、松本、上田等に製糸業が多く見られた。養蚕農家で、生糸にし難い繭等を真綿にして、それを紡いで織るようになり、養蚕の産地がそのまま織物産地となった。生糸で作られた絹織物と違い、この紬織物は、江戸時代においては庶民の使用が唯一認められていたもので、普段着として広く普及した。

「上田紬」「松本紬」「飯田紬」「伊那紬」など、県内各地で発達した紬を合わせて「信州紬」と呼ばれている。各地に自生する様々な植物染料を用いた「草木染」による染色が活発である。

歴史・沿革

信州は蚕の国。江戸時代初期頃より、各藩では桑樹を栽培させ、養蚕を奨励した。紬は屑繭を原材料としていたので、原材料生産地がそのまま織物生産地となり得た。

寛延３年（1750 年）８月紬荷物を京都に送り出したのを皮切りに宝暦から明和の時代にかけて毎年のように送られている。

春繭が糸にとられ織物となった８月下旬から９月初めにかけて、京都大丸は紬を求めにわざわざ手代を派遣し、紬荷物は中山道を京都へと送られていた。

調度貢献明細表によれば、「信濃国は紫草 2800 斤を産して常陸国 3800 斤に次ぐ全国第二位の産地たり」と記されているように草木染材がいたるところに自生していたことから、草木染、手織の技法が全県にわたって普及したものと考えられている。伝統的工芸品として国の指定を受けている。

（問合せ先）　長野県織物工業組合
〒399-4106　長野県駒ヶ根市東町２-29
久保田織染工業㈱内　　TEL：(0265)83-2202

資料２

昭和 62 年２月 10 日指定

龍渓硯（りゅうけいすずり）





【製造地域】
辰野町

概要

江戸時代末期、高遠藩は財政困難となっていた。そのため、なんとか財政を立て直そうと、鍋倉山の石に注目し硯石として硯作りを始めた。高遠藩はすべての硯石を所有し、甲州から硯職人を招き、技術指導をさせ、硯作りを広めていった。当時は、大名などへの贈り物とされ、江戸や大阪など領外へ販売されるようになった。

明治初期には多くの硯職人がいたが、大正時代には、鉛筆・万年筆の普及などにより衰退した。その後、昭和に入り再興し当時の長野県知事大村清一氏により、「龍渓石」と名づけられ、その石で作った硯を「龍渓硯」と呼ぶようになった。

石質が緻密で適度な堅さである原石の特徴を生かし、のみによる手彫り加工の伝統技術で製造されている。現在は、後世に伝えるための活動が行われている。

歴史・沿革

江戸時代、現辰野町上島地区の農民たちが鍋倉沢で掘った石で砥石を作っていたが、砥石となる石が少なく黒雲母粘土という黒い石ばかりが出てきた。その石を使って、寺子屋を営む淵井椿斎が硯を作ってみたところ、墨のおりがよく素晴らしい硯ができた。

その後、財政難となっていた高遠藩が財政立て直しのため、公営事業として硯作りに励んだ。その際、現山梨県南巨摩郡富士川町の雨畑硯の硯工を招き、技術指導を受けた。指導のもと、硯の量産が進み、江戸・大阪など領外へ「高遠硯」「伊那硯」「鍋倉硯」として販売された。

大正時代になり、西洋文具が普及し始めると、硯の需要がなくなり硯作りも衰えた。しかし、昭和になり、硯が見直され需要が増し、「龍渓硯」と命名され、昭和 62 年に長野県知事指定伝統的工芸品に指定された。

（問合せ先）　辰野町役場　産業振興課
〒399-0493　長野県上伊那郡辰野町中央１番地
TEL：(0266)41-1111

資料３

令和８年９月 16 日指定

高遠焼（たかとおやき）





【製造地域】
伊那市

概要

高遠焼は、伊那市高遠町で生産されてきた陶器である。高遠藩が城下への上水道整備に必要な土管を製造するため、美濃国（現在の岐阜県）から陶工を招いて窯を築いたことに始まる。

地元の赤土を原料とする陶器で、素朴で力強い造形と温かみのある風合いを特徴とし、灰釉や鉄釉などを用いた実用的な器が多く製作された。

現在もその歴史的価値と技術が継承され、地域文化を象徴する工芸品として親しまれている。

歴史・沿革

文化９年（1812 年）、高遠藩主内藤頼以の時代に、城下へ給水するための土管製造を目的として始められた。藩は美濃国多治見の陶工らを招き、窯を築いて土管や陶磁器を製作した。これが高遠焼の起源である。

その後、民営に移行し、明治時代から昭和初期にかけては複数の窯が開かれ、徳利や甕、茶碗などの日用品を中心に生産が行われた。

しかし、陶磁器産業を取り巻く環境の変化により多くの窯が廃業し、一時は生産が途絶えたが、高遠焼研究保存会の設立とともに町営の「桜窯」が開窯され、陶芸家・唐木米之助氏によって高遠焼が再興された。

以来、地域の歴史と文化を伝える焼き物として、その技術と伝統が今日まで受け継がれている。

（問合せ先）　高遠焼振興会
〒396-0214　長野県伊那市高遠町勝間 142－１
TEL：(0265)94-2813